国際航海における英語使用の必要性について―過去4年間のアンケート調査の分析より―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 二五, 義博, NIGO, Yoshihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0000000034

Copyright © JAPAN COAST GUARD ACADEMY 2021

【研究ノート】

国際航海における英語使用の必要性について
―過去４年間のアンケート調査の分析より―

The Necessity of English Use in the International Voyage:
Through the Analysis of Questionnaire Results over
the Past Four Years

二　五　義　博

海上保安大学校　研究報告　第66巻　第1号　通巻第113号　令和3年度

【研究ノート】

国際航海における英語使用の必要性について
―過去 4 年間のアンケート調査の分析より―

二五　義博

1. はじめに

海上保安大学校では、本科を卒業した後に原則として全員が専攻科に進み、約 3 か月にわたる世界一周の遠洋航海実習を行っている。ここでは、航海技術等を磨くだけでなく、国際感覚を養い語学力を向上させることも重要な目的とされている。本報告では遠洋航海実習を終えた研修生全員を対象とし、英語教育の側面に観点を絞る形で、4 年連続でアンケート調査を実施した。アンケートの分析結果、まず、英語使用の機会がどのくらい、どのような場面であるか、またどの程度英語が習得できたかなどを明らかにしたい。次に、そこから国際航海における英語学習効果や課題を考察するとともに、最後には、国際航海で英語使用や学習効果を高めるためには、本科のうちにどのような英語学習や準備が必要かなども提案したい。

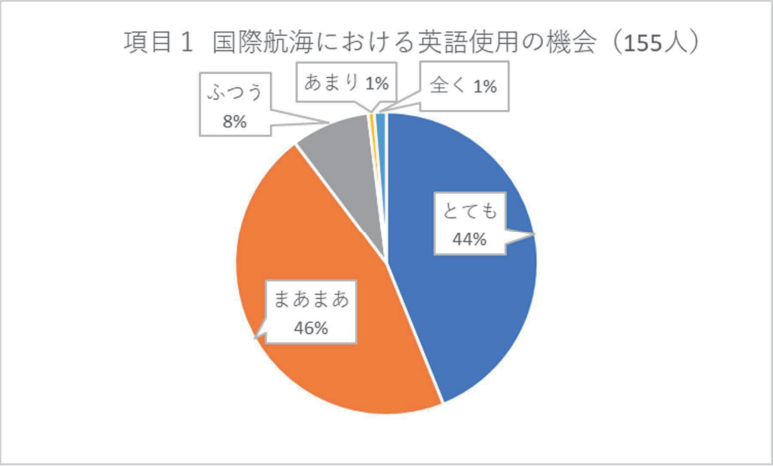
アンケート調査用紙（添付資料）は、2016 年度から 2019 年度までの間に国際航海に参加した全専攻科研修生に配布された。そのうち、未記入や重複回答などで無効となった数枚を除き、155 人から有効な回答を得た。本アンケートは、選択式と自由記述式から構成される。その分析方法としては、前者は 5 件法、後者は類似の回答のカテゴリー化および代表的な回答例の紹介という形をとる。

理論的には、本稿は CLIL（Content and Language Integrated Learning）に基づいている。CLIL は、Coyle, Hood and Marsh (2010)が主唱し、渡部・池田・和泉 (2011)が本格的に日本へ紹介したものであるが、「内容」と「言語」の学習を効果的に結びつけ、両方の学習の相乗効果を図ろうというものである。この理論を適用すると、研修生が航海・機関・通信の専

門技術について国際航海を通じて学びながら、同時に、いかに効果的に英語を習得するかが重要となる。本稿においては、遠洋航海実習における「語学」の側面に焦点をあてて考察を進めることとする。

2. 国際航海における英語使用の機会と使用の場面

アンケート項目１の「国際航海では、英語を使用する機会がどのくらいありましたか」の問いに対しては、「とても」「まあまあ」の肯定的回答が 90%を占め、「あまり」「全く」の否定的回答はわずか 2%であった。ここからは、研修生が世界一周の遠洋航海実習全体を通じて、英語使用する機会の多さを感じていることが分かった。では、具体的にはどのような場面で、研修生が英語を使用する機会があったのであろうか。



次に、アンケート項目２の「英語を使うのは主にどのような場面だったか、具体的に書いて下さい」より、英語使用の代表的場面について見ていく。研修生から英語使用の場面について様々な指摘があったが、まず、その回答を「船内（航行中）において」と「寄港地（停泊中）において」の２つに大きく分類する。その上で、大分類ごとに類似の回答を細かくカテゴリー化し、各カテゴリーの人数とともにまとめると以下のようになる。

①　船内（航行中）において

● アメリカ（USCGA）やアジアの学生・研修生、職員等（MMEA, PCG）との実習（仕事の説明、実習の案内）・職務の交流・コミュニケーション、船内生活（食事・寝室）の日常会話、船内生活要領（生活の流れ、スケジュール、洗濯機やお風呂の使い方を教えるなど）の説明　89
● VHF を使った他船（外国船舶）との通信、コミュニケーション、避航操船　38
● 航海ワッチ中、航海当直の引継ぎ事項の伝達　24
● 出入港時に水先人、パイロットが乗船する場面での会話　20
● 出入港前後における外国の陸上局、海岸局、管制局との通信　16
● パイロット操船時や操船している時の操舵号令　10
● 機関科の仕事内容を教える時、一般公開での機器の説明　6
● 航海中の無線、無線通信、航海科への転科実習中の無線　5
● 他国から遭難信号を受信した時への対応　4
● 出入港、通航要領の資料作成、英文日誌の記入　3
● 整列や人員報告、船内周知の放送等　3
● 航海中における VTS との通信　3
● 通信科としてのワッチ中、見張りの報告　3
● こじま一般公開での案内・説明　3
● 運河通航中　2
● 燃料搭載　2
● 出入港時の船外マイク放送　1
● 海外の海上保安機関への架電及び FAX、メール　1
● 英語で書かれた水路図誌の和訳　1
● 岸壁の方への索の掛け方の指示　1

②　寄港地（停泊中）において

● 各寄港地でのレセプション、日本文化紹介　85
● 寄港地における休日の外出時　56

● 海外の施設訪問、業務見学　6
● 現地の人との交流プログラム　5
● 寄港地での業務講話　2

以上を分析すると、まず、「船内（航行中）において」については、海外のコーストガード（沿岸警備隊）の学生や職員等が乗船し、一緒に航海をしている際の英語使用が 155 人中で 89 人と最も多かった。その使用場面は、海外のコーストガードと同室になった時の日常生活面から、船内生活においての船務、船内の設備やルーティーンの説明など多岐にわたった。

2 番目に多かったのは、38 人の研修生が回答した、VHF を使った他船（外国船舶）との通信である。とりわけ、避航操船のための他船との通信では、呼び出し、感度交感、「私は右に曲げるので、あなたは左に曲げて下さい」といったやり取りが全て英語で行われた。

3 番目は 24 人の研修生（特に航海科）が挙げた、航海ワッチ中、航海当直の引継ぎ事項の伝達である。これは日本人同士でも語学練習のために英語で試みられていたようであるが、とりわけ、海外のコーストガードの方と一緒にワッチに入った時には、航海当直での引継ぎ内容が 100％英語にて説明されていた。

4 番目に多かったのは、出入港時に水先人、パイロットが乗船する場面での会話で、回答数は 20 人であった。例えば、パイロットボートとの連絡（右舷にパイロットラダーを海面上何メートルにするかなど）は英語で行われた。またこれは、出入港作業等でパイロットが乗船してきた時に、海保大研修生がパイロットに対して周囲の状況や自船の状況を英語で伝えることなどを含む。

5 番目は研修生の 16 人が回答した、出入港前後における外国の陸上局、海岸局、管制局との通信である。この通信は、VHF 通信や電話の手段をとる。具体的には、パイロット・ステーションへの入港予定時刻等の連絡、入港前のポートラジオへの位置その他の情報確認（本船の緯度・経度、入港予定時刻、パイロット会合の内容をたずねる）などが英語で行われた。

6 番目は研修生の 10 人が列挙した、パイロット操船時や操船している

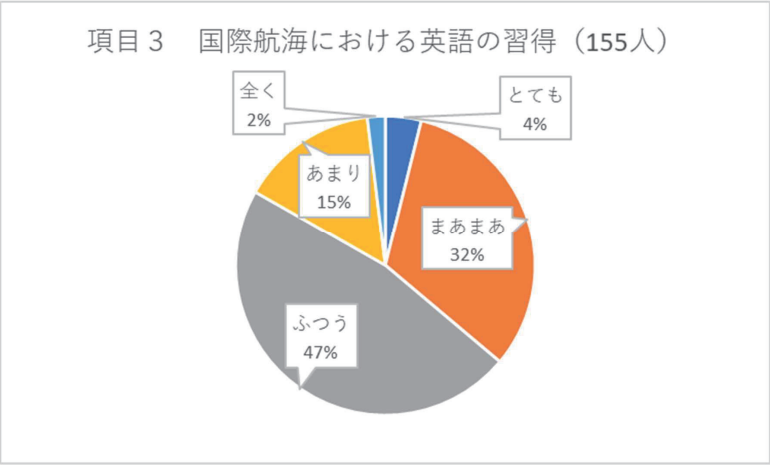
時の操舵号令である。特に、海外の水先人が乗船している時には、号令詞に基づく操船指示などを含め、船橋内では常にコミュニケーションの手段として英語が使われた。

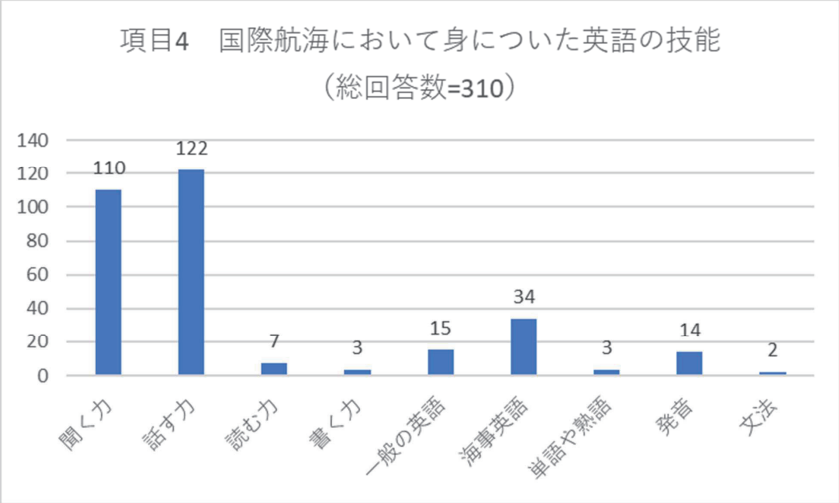
その他の少数回答の中で特殊な事例としては、他国から遭難信号を受信した時への対応（4 人）があった。これは、遭難通信受信時に、遭難位置を管轄する国のコーストガードや海外機関に英語で電話連絡したものである。また、科別に見ると、英語使用は航海科に関わる業務（船舶動静の報告、航海当直での引継ぎ、船橋での航海計器等の説明など）が多いが、少数回答の中には、機関科の仕事内容や機器の説明（6 人）、通信科としてのワッチ中や見張りの報告（3 人）といった機関科や通信科に特有な場面もあった。

次に、「寄港地（停泊中）において」の英語使用場面については、155 人中、各寄港地でのレセプション（84 人）と寄港地における休日の外出時（56 人）に回答が集中した。前者は、ウェルカムやフェアウェルのパーティーの際に行われた、各国要人や現地の人との英語での日常会話である。こういった各種パーティーにおいては、研修生により、剣道や応援団、餅つきといった日本の伝統文化の紹介が英語で実施された。後者は、寄港地での観光、娯楽、食事、買い物や電車・バス・タクシーでの会話、現地の人に道を尋ねるなどの英語での日常会話である。

3. 国際航海における英語の習得

アンケート項目 3 の「国際航海で英語はどのくらい習得できたと思いますか」の問いに対しては、「とても」「まあまあ」の肯定的回答が 36%を占め、「あまり」「全く」の否定的回答は 17%であった（回答者の半数近くはどちらでもない）。肯定的回答と否定的回答の割合の差が 2 倍以上あることから、多くの学生は国際航海において航海技術等を学びながら、英語もある程度は習得できたと考えていることが分かった。しかしながら、「とても」の回答が 4%と少なかったことや否定的回答も 2 割近くあることは、国際航海の語学面での習得を考えた場合、少なからず課題もあったと推察できる。





アンケート項目４の「国際航海の経験を通して、どんな英語の力が身についたと思いますか」の問いに関しては、複数回答が可能だったことから、研修生 155 人の総回答数は 310 であった。まず、英語の 4 技能別に見ると、「聞く力」と「話す力」を挙げた研修生が圧倒的に多く、割合では両技能が総回答数の 74.8%を占めた。それに対して、「読む力」と「書く力」は合わせて、全回答数のわずか 0.03%であった。この割合の差は、項目 2 の英語使用の場面と深く関連している。リスニングやスピーキングの技能

に関しては、海外のコーストガードの学生・職員とのコミュニケーション、外国船舶との通信、航海当直の引継ぎの伝達、水先人との会話、出入港時の通信、操舵号令、各寄港地でのレセプションや休日の外出時などの多岐にわたる場面で、非常に多くの研修生がこれらの技能の使用機会の多さを指摘している。その一方で、リーディングやライティングの技能に関しては、ごくわずかな研修生が挙げた、通航要領の資料作成や英文日誌の記入、海外の海上保安機関への FAX やメール、水路図誌の和訳などに使用機会が限定された。次に、英語の種類別に見ると、総回答数は何れも少ないものの、「海事英語」を習得できたとした研修生の割合（0.11%）が、「一般の英語」を習得できたとした同割合（0.05%）より 2 倍以上多かった。これは、研修生の大半の時間は船上での実習に費やされており、寄港地やオフの時間での日常会話よりも、航海・機関、通信の実習において海事英語に触れる機会が比較的多かったためと思われる。他方で、「単語や熟語」「発音」「文法」は合わせて、全回答数の 0.06%で、これらの技能を習得できたとした研修生はごくわずかであった。とりわけ、「単語や熟語」と「文法」については、日本での普段の英語の授業とは異なり、国際航海のような実践の場においては身につきにくいと感じた研修生が多かったようである。

アンケート項目 4 の自由記述「その他に英語で勉強になったことがあれば、具体的に自由に書いてください」の問いについては、回答数が少なかったため量的な分析は行わず、以下に全ての回答例を示すこととする。

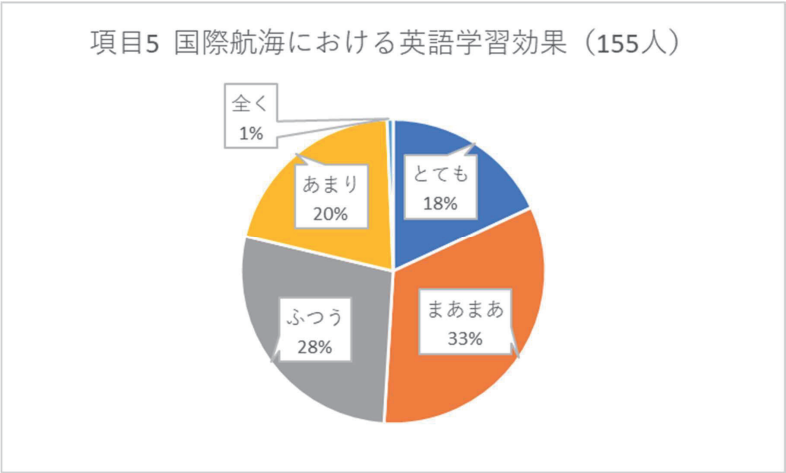
- 何とか知ってる単語とジェスチャーで伝える力。
- How are you?と聞かれて、I'm fine. よりも It's good.の方が普通であるというようなスラング的な事。
- 無理に正しい文法を使おうとしなくても、伝えようと話し続けると分かってくれる。
- ネイティブとの会話での冗談やトーク技術、話しかけ方、ジェスチャーやボディランゲージ。
- 実際の船舶間の通信は簡略化されていた。

- 海外の方とのコミュニケーションスキル。
- ネイティブ以外の国のなまった英語。
- 難しい言葉を使わなくても会話はできること。
- 伝える努力が大切。
- ボディランゲージを頑張れば何とか伝わる。
- 英語独特の言い回し。
- ボディランゲージの大切さ。
- 日本のこと（文化等）を話す必要があり、勉強になりました。
- 国によって発音の仕方が違い、東南アジアは特になまりが凄い。
- よく使えるフレーズを聞いて覚えること。
- 海事英語は、場面によるが、実際に使う機会がある。
- 絶対に話さなければならないので、伝えようとする力も身についた。
- 異文化について。
- 英語を話すことに対する抵抗感がなくなった。
- ボディランゲージ。
- 多少わからなくても、ノリと勢いで積極的に話すこと。
- アメリカの文化（外国の文化）。
- 実際に英語を用いて仕事をされている方の話を聞くこと。
- 通訳の方と話すことができたのは良かった。
- 英語と一緒にボディランゲージを使うと効果が高かった。
- 会話中に知らない単語が出てきても、質問をして理解するコミュニケーション力がついたと思います。
- その気になれば、英語を用いなくても伝わる。
- 文法ができなくても話せるという事が分かり、話せるようになった。

以上の自由記述より、その他に英語で勉強になったこととしては、ジェスチャーやボディランゲージの大切さ、コミュニケーションに対するスキルや意欲、英語独特の言い回し、外国の文化、文法ができなくても話せること、国によって英語にもなまりがあること、海事英語を実際に使える場面があることなどが挙げられた。

4. 国際航海における英語学習効果や課題

アンケート項目 5 の「国際航海は、語学の面での効果についてのみ考えると、どのくらい満足できましたか」の問いに対しては、研修生の満足度の視点から考察すると、「とても」「まあまあ」の肯定的回答が 51%を占め、「あまり」「全く」の否定的回答は 21%であった（回答者の 3 割近くはどちらでもない）。ここからは、研修生の約半数が国際航海における英語学習の成果について、多かれ少なかれ満足していることが分かった。しかしながら、アンケート項目 3 の英語習得の結果と同様に、研修生の約 5 分の 1 は世界一周後の英語学習の成果に必ずしも満足していない点は見逃せない事実であろう。では、研修生が 3 か月にわたり海上保安業務に関する技能を身につけながら、教室とは全く環境の異なる実践の場で英語学習をしていく上で、どのような課題があったのであろうか。



アンケート項目 6 の「国際航海で英語を使う上で、何か困ったと思った経験があれば書いて下さい」の問いへの回答より、研修生たちが実習の中で感じた、英語に触れたり使用したりする上での問題点を具体的に見ていく。ここでは、研修生の自由記述文を共通するカテゴリーごとに分類し、

研修生の回答数が多い順に並べて分析することとする。

● 会話のための一般の語彙力不足　41
● ネイティブでない人との英語での会話　25
● 言いたいことがなかなか伝えられない　18
● 海事の専門用語が分からない　15
● 特に困ったことはない　13
● 話すスピードが速く理解できないこと　12
● リスニング能力の低さ　11
● 英会話の経験不足　11
● 発音の難しさ　8
● VHF での会話　5
● 目上の人への英語の使い方　3
● 文法力不足　2
● 英語が使えないと海外では生きていけない　1
● 寄港地での行動を複数でしなければならないというルール（安全上の理由ではもちろんのことだが、英語力を伸ばすには不適）1
● 文化の違いでどう表現したらいいか、分からないことがあった　1

以上を分析すると、国際航海において英語を使用する上で 1 番の問題点と感じられたのは、155 人中で 41 人の研修生が自ら指摘した、「会話のための一般の語彙力不足」である。単語や熟語、重要な名詞などを知らないと、買いたいものさえ買えないし、何も話すことはできないと感じる研修生が圧倒的に多かった。中には、「単語が分かればジェスチャーと組み合わせて何とか通じるが、単語も分からなければどうにもならなかったので、一番は単語（語彙）が必要だと感じた」という指摘もあった。また、単語の重要性は特に海上の場合、携帯の電波が届かなくてインターネット上で単語を容易には調べられないといったことにも起因している。

2 番目に多くの研修生が国際航海を通じて英語の実践学習をする中で、これまでの英語学習から困難と感じたのは、155 人中 25 人が回答した「ネ

イティブでない人との英語での会話」であった。これは本科の 4 年間の授業においてネイティブ講師の授業を受け続けていてその発音に慣れていることにも原因があるであろうが、研修生の多くが母国語を英語としない人は聞き取りづらいことを指摘した。とりわけ、ベトナム・シンガポール・フィリピン・インドネシア・イタリアはなまりや癖が強すぎたり発音やアクセントが異なったりして聞き取れないし、相手も英語が得意ではないことから英語が通じにくいという声が多くあった。こういった国々の人たちとは、発音の違いにより、自分の意志・意見を伝える事ができない、電話が通じない、VHF の聞き取りができないといったことが頻繁にあったようである。

3 番目に困った経験として 24 人の研修生が挙げたのは、「言いたいことがなかなか伝えられない」ことである。これには、とっさに言葉が出てこない、日頃日本語で説明していることを英語で行おうとすると急には言葉が出てこない、伝えられないもどかしさなども含む。簡単な事であれば言えたとしても、議論などになると言葉が出にくかったようである。職務上で危険なケースとしては、「当直中などは、一瞬で言葉が出てこなければならないが、なかなか出てこないことが多かった。また、引継ぎ事項を英語で行う時にメモを見ながらのため、前方への見張りがおろそかになった」との指摘もあった。

4 番目は 15 人の研修生が挙げた、「海事の専門用語が分からない」である。これが一番、航海実習の内容とも深く関わるであろうが、これら研修生は多くの実践的場面で海事英語を使用するのが困難と感じたようである。例えばそれは、ブリッジで説明しようとする時、操舵号令、普段行っている作業、船の説明、機関系の用語を用いての他国海上保安機関の方への説明、付近の船舶への報告、航海計器や船体各部の名称などである。重要な回答としては、「他船との通信やパイロットとの連絡で内容に誤りがあると運航に支障をきたしてしまうため、海事英語の使用を試みる際には注意を要した」というものがあった。

5 番目に多かったのは、「特に困ったことはない」で、回答数は 13 人であった。ここでは追加のコメントを紹介すると、「多少伝わらないことも

あったが体・ジェスチャーで表現しながらなんとか伝えた」、「教科書の定型文で何とか対応できた」、「文章を使わなくても単語のみで伝えられた」などがあった。

6 番目は研修生の 12 人が回答した、「話すスピードが速く理解できないこと」である。これは話し相手がネイティブの場合に起こりやすい。具体的には、外国人同士の会話に入って行くとき、海外でのナチュラルスピードの無線を聞くとき、レセプションでネイティブが手加減しない場合などがあった。

7 番目は同数で 11 人の研修生が列挙した、「リスニング能力の低さ」と「英会話の経験不足」であった。前者は、伝えるのは何とかできても聞けないと意味がないことを根拠にリスニングの重要性を強調する研修生がいた。また、聞き取れなくて何度も聞き返すことで対処した者もいた。後者は、英語を話すこと自体に不慣れであったり、実践的な会話表現やフレーズをあまり知らなかったりすることと関わる。研修生の実際の声としては「簡単な英語で説明できる力がなかったので、堅苦しい英語でしか話せなかった」や「経験不足から失敗を恐れて話す機会を自ら減らした」などがあった。

10 人未満の少数回答としては、まず、8 人の研修生が回答した「発音の難しさ」があった。ここでは、2 番目の「ネイティブでない人との英語での会話」とは正反対であるが、「第二外国語として英語を話す人よりも、ネイティブの発音が聞き取れず、コミュニケーションに苦しんだ」という意見を持つ研修生もいた。また、「日本で流通しているカタカナ英語や地名に慣れていて、発音が悪く聞き取ってもらえない」と指摘する者もいた。次は、研修生の 5 人が挙げた「VHF での会話」である。これが英語学習の実践の場として困難である理由は、無線通信ではジェスチャーが使えないこと、元々英語の聞き取りが苦手な上に音声が鮮明でないこと、海や風、エンジン音などのノイズが多いことなどである。さらには、3 人が回答した「目上の人への英語の使い方」では、「Sir や Ma’am の使い方」、「thank you と appreciate の使い分け」、「水先人に何かお飲み物はいかがですか等、接客的な会話力も必要」といった具体例が挙げられた。

5. 本科授業や個人学習で役立った点と国際航海に向けての必要な準備

アンケート項目 7 の「国際航海で英語を使う上で、本科の授業や個人の学習で役立ったと思う点があれば書いて下さい」の問いへの回答からは、研修生たちが国際航海に向けての語学面での準備の中で、実際に効果的であったと感じた事項について具体的に見ていく。ここでは、前項と同様に、研修生の自由記述文を共通するカテゴリーごとに分類し、研修生の回答数が多い順に並べて分析することとする。

- 海事英語の授業（教科書）および海事英語の単語や知識　75
- ネイティブ講師の授業および日常英会話　33
- リスニングや速聴の練習　12
- （個人及び授業での）単語や熟語の勉強　11
- 簡単な英語表現の習得　5
- 特に役立ったものはなし　3
- 日本の文化についての知識　2
- 実際に一人で海外に行く　1
- 英語にかかわる全て、英会話から文法まで　1
- 英語を楽しむこと　1
- 音楽、NBA、メジャーリーグに関する知識があったことで、話を広げることができた　1
- 国際航海で使うのは会話がほとんどなので、ロールプレイは少し役立った　1
- 自分たちの紹介　1
- まずはお互いが慣れ親しむために日常会話をスラスラできるようにし、その上で専門的な英語をという順が、遠洋航海では役立つと思った　1

以上を分析すると、研修生が国際航海にて英語を実践的に使う際に、これまでの本科の授業や個人学習で最も役立ったと感じたのは、155 人中の 75 人という半数近い研修生が指摘した、「海事英語の授業（教科書）およ

び海事英語の単語や知識」である。いくつかの研修生のコメントを紹介すると、まず、教科書に関しては、「海事英語の教科書は非常に有効だと感じたし、使用している教科書がすごく良い」と高評価をするものがあった。次に、教科書で学んだ内容と国際航海実習との関連性については、「パイロットの指示が、海事英語で学んだ英単語を使用していたので、役に立ったと思う」、「教科書で出てきたメッセージマーカーは実際に使われていて役に立った」、「実際の場面を想定した会話形式のシミュレーションは現場で役に立った」、「教科書で扱う IMO 準拠の海事英語は海外でも共通なので役に立った」、「赤い本（教科書）の特に「○時の方向に船がいる」「速力○ノット」などは船橋でよく使用する文だった」、「海事英語は定型文も多く、知っていれば操船がしやすいと思った」などのコメントが見られた。他には、船橋内での操船指揮や操船号令、VHF 通信、他船との通信、ワッチ中の英語などにおいて、海事英語で学んだ内容が生かせたと考えた研修生が少なからずいた。本科における事前の海事英語の勉強は、国際航海の実習で実際に使う英語と、全てではないにせよ、ある程度は結びついていたようである。なお、科別に見ると、一部の研修生からは「特に航海科は海事英語を重点的にやるべき」という意見もあった。

2 番目に多くの研修生が、これまでの英語学習で国際航海に役立ったと感じたのは、155 人中 33 人が回答した「ネイティブ講師の授業および日常英会話」であった。項目４の「国際航海において身についた英語の技能」のところでも既に見たように、国際航海での英語の使用場面はスピーキングやリスニングを中心とした英会話がほとんどで、リーディングやライティングの機会はあまりなかった。そのため、話す・聞くのコミュニケーションが中心のネイティブ講師の授業を普段から受けていることで、耳が慣れ、話すことに慣れ、国際航海での会話の手助けとなったという印象を持った研修生が多かったようである。具体的な研修生のコメントとしては、「いかにネイティブが使う表現をマネするかを普段から意識していたので、そこは役に立った」、「実際に外国人と話すことで能力は上がると思った」、「海事英語もある程度は必要だが、まずは日常英会話ができないとだめだと思う」などがあった。最後のコメントに関しては、先の海事英

語が役立ったとする意見とは正反対の考えである。

3 番目に多かったのは 12 人の研修生が挙げた、「リスニングや速聴の練習」であった。これは授業と授業外での両方を含むが、リスニング教材では、CD、動画、ニュース、洋楽、映画、ドラマなど様々なものが用いられた。これらの教材を通してナチュラルスピードの英語に触れたことは、国際航海での英語使用に多かれ少なかれ役立ったようである。いくつか研修生のコメントを紹介すると、「リスニングを重点的にしていたことで、現地の人が何を言っているか理解することはできた」、「海外ドラマをよく視聴していたので、自然なスピードの会話も何となく理解できた」、「好きな洋画又は洋楽に出てくる文章を聞き、同じスピードで言えるようにする練習が役立った」などがあった。

4 番目に役立った事として 11 人の研修生が挙げたのは、「（個人及び授業での）単語や熟語の勉強」である。基礎的な単語の復習を含め、事前にしっかりと単語や熟語の学習をしておくことは、航海中や寄港地での各場面において、少なから役立ったと思われる。例えば研修生からは、「話す・聞く能力を活用する上で、知っている単語が出てくると話の内容が憶測できた」、「単語を勉強しておけば、後はボディランゲージで何とかなることが多かった」といった声が寄せられた。

10 人未満の少数回答としては、まず、5 人の研修生が回答した「簡単な英語表現の習得」があった。研修生の中には、海事英語のような難しいことをやるよりも、簡単な英語で喋る練習をしておいたり、寄港地での道の聞き方など日常的な英語表現を習得しておいたりした方が国際航海には役立つと考える者もいた。これら研修生のコメントとしては、「難しい英語を使うより、中学単語レベルの簡単な英語の方が通じやすい」、「中学～高校レベルぐらいで、何とか話したり説明したりして伝えようとするものが役立った」。「文法や単語を習得できていれば会話はできるので、簡単で単純なことをもっとやった方がいいと思った」などがあった。次には、3 人の研修生が「特に役立ったものはなし」という否定的な回答をした。その理由としては、「実地での体験にまさるものなし」や、より厳しい意見として「TOEIC の対策では英語能力は向上しない」などが挙げられた。

その他には、日本文化の知識、海外への一人旅、英語にかかわる全て、ロールプレイが国際航海に役立ったと考える研修生もいた。

最後に、アンケート項目８の自由記述「国際航海に行く前に、本科の授業や個人の学習で何かやっておけば良かったことがありますか」の問いに関しては、比較的回答数が少なかった。その上、自由記述の中には多岐の項目にわたる長文の回答もあったため、量的な分析は行わず、以下に代表的な回答例を示すこととする。

- 海事英語の単語。
- 海事英語を勉強しておく（パイロットへの報告方法、より実務的なVHFでの通信、海外のコーストガードの人たちに対する当直の説明、船の構造を英語で説明など）。
- 気象・海象、航海計器の英語等も勉強できると良い。
- 本科の授業については個人差があるので仕方ないが、船上もしくはプライベートを模した、トーク練習、スピーキングの演習がより多いと効果的だと思う。
- 海事英語をもう少し多めに、頻出でない箇所は除いて常用のものを重点的にしておきたかった。
- こじまの引継ぎ事項を英語で伝えれるようになって行けば良かった。
- 機関科での自分の仕事を英語で説明できるようにしておけば良かった。
- 機関用語の英語での授業をもっとやり、船内で使用する英語（エンジン関係）を覚えておけば良かった。
- 群ごとにワッチで使う英語の学習。
- 海事英語の授業を増やせば良いのではないかと感じた。
- ネイティブ講師による授業にしっかり取り組むべきであった。
- ネイティブの人と話すなどの日常英会話。
- 外国の方と話して慣れること。
- 会話能力を高めておきたかった。
- 目上の方と初対面で会う際の挨拶、会話の仕方。

- 「英語」の勉強ではなく「英会話」の勉強をしておけば良かった（日常会話）。
- 英会話ができる程度の英語力を身につけておけば良かった。
- テキストをこなすよりも、英語をしゃべる、聞くということに重点をおいて学習していけば良かった。
- 国家試験に向けた英語も大切であるが、もう少し日常会話もできるようになっていれば良かった。
- 本科の英語の授業はテキストを用いた読み書きが多かったように思うが、実際の国際航海では会話（リスニングやスピーキング）が圧倒的に多かった。
- 授業において、日本人教官はもとより、外部の先生も私たちが聞き取りやすい発音をしてくれるので理解できたが、ネイティブの発音は全然違うということを痛感したので、個人的なリスニングの練習の必要性を感じた。授業でそのような遠慮のない発音に聞きなれておけば良かった。
- ネイティブのスピードについていけるリスニング力がもっと必要と感じた。
- とにかく耳を慣らすために、もっとリスニングを日頃からしておけば良かった。
- 総合的な英語力を向上させる。
- もう少し英語を好きになっておきたかった。
- 日常会話で使える単語・熟語の学習。
- 基本単語やその発音を覚える。
- 旅行で使用する簡単な英語のフレーズを覚えておけば良かった。
- 結局、中学レベルの英単語でしか話せなかったため、身にしみつくレベルの英単語を増やしておくべきだった。
- 文法よりもとにかく単語量を少しでも増やせば、少しは話せるのではないかと思う。
- 文法などを学ぶのも大切ではあるが、会話をするのが重要視される遠洋航海では、速い英語を聞かないといけない。会話で使われる言い回

しを学んでいないと聞いたり話したりができないので、そういう会話に特化した言い回しについて勉強しておく必要があると思った。

- もっと英語を聞く力、話す力を身につけておけば良かった。また日本や海上保安庁について英語で説明できるようにしておけば良かった。
- 日本について知ること。
- 文化交流のため、日本や自分たちの紹介を準備しておくべきだった。
- 日本のことをある程度説明できるようにしておくこと。
- 自己やこじま、海上保安庁の紹介を英語でしておけば良かった。
- レセプション時に目上の人に対する英語上の礼儀、例えば Sir をつけるとかの学習。
- レセプションの出し物の準備をもう少し行っておけば良かった。あまりどんな雰囲気だとかが分からないので準備しづらい。こじまから動画や写真を学生に提供すれば少しはイメージがわくと思う。
- 寄港地での話題のためにその国について調べておけば良かった。日本語での会話もままならないのに英語で話せる訳もないので、会話の練習をする必要があった。

6. おわりに

本報告は、世界一周の国際航海を終えた専攻科研修生に対し、2016 年度から 2019 年度までの 4 年間に実施したアンケート調査結果に基づき、分析を進めてきた。

調査の結果、まず、国際航海における英語使用の機会については、研修生の 90%にも及ぶ肯定的回答からも推察されるように、かなりあったと結論付けられる。英語の使用場面については、大きく「船内（航行中）において」と「寄港地（停泊中）において」の 2 つにカテゴリー化されるが、非常に多岐にわたっていることが分かった。前者では、海外のコーストガードの学生や職員等との実習や日常生活、VHF を使った他船（外国船舶）との通信、航海ワッチ中、航海当直の引継ぎ事項の伝達、出入港時に水先人、パイロットが乗船する場面、出入港前後における外国の陸上局、海岸局、管制局との通信、後者では、各寄港地でのレセプションや寄港地にお

ける休日の外出時において、主に英語が用いられた。

次に、国際航海における英語の習得については、肯定的回答が否定的回答の 2 倍を上回ったことから、多くの研修生は 3 か月の間にある程度の英語を身につけることができたと考えていることが分かった。技能別に分析すると、「聞く力」と「話す力」を習得できたとした研修生が圧倒的に多く、これは英語の使用場面とも深く関わっていると思われる。同様に、国際航海における英語学習効果に関しては、過半数の研修生が肯定的な回答をし、3 か月に及ぶ実践的な英語学習の成果には一定の満足感があることが分かった。その一方で、教室での英語学習とは異なり、世界に出て生の英語に触れる際には問題点や困った点も多く指摘された。その主なものとしては、会話のための一般の語彙力不足、なまりの強いネイティブでない人との英語での会話、言いたいことがなかなか伝えられない、海事の専門用語が分からない、話すスピードが速く理解できない、などがあった。

また、国際航海に向けての本科での事前学習で役立ったことについては、「海事英語の授業（教科書）および専門用語」と「ネイティブ講師の授業および日常英会話」の 2 つに、研修生の意見が大きく分かれる結果となった。これは、国際航海における英語使用に関して、航海実習で英語を使うことを重視するのか、それとも、レセプションや海外の人との日常的な交流を重視するのかで大きく考えが割れたものと思われる。

そこで最後に、学生の自由記述も参考にすると、国際航海で英語使用や学習効果を高めるためには、本科のうちに海事英語と日常英会話の両方の準備が必要であることを提案したい。加えて、速いスピードのリスニング練習、基本的な単語・熟語の学習、海外でよく使われる英語表現の習得、日本文化や海上保安庁、寄港地についての事前学習も必要である。

参考文献

Coyle, D., Hood, P., and Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge University Press.

渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011).『CLIL(クリル) 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たなる挑戦　第 1 巻　原理と方法』上智大学出版局.

添付資料

＜国際航海アンケート（英語の部分）＞

＜１＞国際航海では、英語を使用する機会がどのくらいありましたか。

１．とてもあった	２．まあまああった	３．ふつう
４．あまりなかった	５．全くなかった	

＜２＞英語を使うのは主にどのような場面だったか、具体的に書いて下さい。

＜３＞国際航海で英語はどのくらい習得できたと思いますか。

１．とても習得できた	２．まあまあ習得できた	３．ふつう
４．あまり習得できなかった	５．全くできなかった	

＜４＞国際航海の経験を通して、どんな英語の力が身についたと思いますか。

（**複数回答可**）

１．聞く力	２．話す力	３．読む力	４．書く力
５．一般の英語	６．海事英語		
７．単語や熟語	８．発音	９．文法	

また、その他に英語で勉強になったことがあれば、具体的に自由に書いてください。

（　　）

＜５＞国際航海は、語学の面での効果についてのみ考えると、どのくらい**満足**できましたか。

１．とても	２．まあまあ	３．ふつう	４．あまり	５．全く

＜６＞国際航海で英語を使う上で、何か困ったと思った経験があれば書いて下さい。

＜７＞国際航海で英語を使う上で、本科の授業や個人の学習で役立ったと思う点があれば書いて下さい。

＜８＞国際航海に行く前に、本科の授業や個人の学習で何かやっておけば良かったことがありますか。